「子どものこころ」の解明への取り組み

「子どもの健全な発達を支えるためには何が必要か？」ということが、近年問われ続けている。超少子社会を迎えるわが国において、1人でも多くの子どもたちの体とこころの健やかな成長を手助けし、子どもたちが健全な生活を送ることができる社会をつくることが早急に求められている。

そのような中、むしろ我々が良く目の当たりにするのは、理想とする社会とは全く正反対の現実ーすなわち、児童虐待の存在する社会である。児童虐待には殴る・蹴るといった身体的虐待、性的な接触をしたり、性行為やポルノ写真・映像にさらす性的虐待、不適切な養育環境や食事を与えないネグレクト、暴言による虐待、子どもの目の前で家庭内暴力（ドメスティック・バイオレンス；DV）を目撃させるなどの心理的虐待が含まれる。こうした虐待により命を落とす子供がいるという痛ましい事実を、多くの人が知っていることだろう。養育者の暴力の結果、生涯に及ぶ障害を負う子どももいる。しかし何とか虐待環境を生き延びた子どもたちであっても、他者と愛着を形成する上で大きな障害を負い、身体的および精神的発達に様々な問題を抱えているのである。その上、児童虐待によって生じる社会的な経費や損失が、2012年度で少なくとも年間1兆6千億円にのぼるという試算も発表されている。児童虐待が子どもの心に与える影響だけでも重大であることはもちろんだが、その負債は確実にわが国全体を覆いつつある。

私は、日米科学技術協力事業「脳研究」分野グループ共同研究の一環として、2003年からハーバード大学精神科のタイチャー准教授と、小児期のマルトリートメント（虐待）経験に伴う脳の器質的・機能的な変化と発達障害との関連を、脳MRI画像を使って研究し、報告してきた（図）。激しい体罰による前頭前野の萎縮、暴言虐待による聴覚

野の拡大、性的虐待による視覚野の萎縮、両親のDV目撃による視覚野の萎縮などが、研究から明らかになってきた。

こうした脳の損傷は「後遺症」となり、将来に渡って子どもに影響を与える。トラウマ（心的外傷）体験からくるPTSD、記憶が欠落したりする解離など、その影響は計り知れない。これらの症状に対して適切な治療を施さなければ、うつ病の発症や自殺行為、衝動的な行動につながることがあり、薬物やアルコール依存のほか、性犯罪の加害者にも被害者にもなりうるなどの事態に至ることもある。

児童虐待への曝露が脳に及ぼす数々の影響を見てみると、人生の早い時期に幼い子どもがさらされた想像を越える恐怖と悲しみの体験は、子どもの人格形成に深刻な影響を与えずにはおかない。このことは、どうやら一般社会にも認知されてきたようである。子どもたちは癒やされることのない深い心の傷を抱えたまま、様々な困難が待ち受けている人生に立ち向かわなければならない。それは非常に厳しい道のりで、挫折してしまうことが多いということは先述の通りである。しかし、子どもの脳は発達途上であり、可塑性という柔らかさを持っている。早いうちに手を打てば回復することが、我々の研究から分かってきた。そのためには、専門家によるカウンセリングや解離に対する心理的な治療、トラウマに対する心のケアを、慎重に時間をかけて行っていく必要がある。

近年、人生の最初期における愛着形成、信頼の形成が人間の発達にとって決定的に重要であるとの認識が広まっていることはとても意義深い。というのは、そこから生まれてくるのは子どもたちに対する視点だけではなく、同時に、親になった者たちの困難さにも寄り添うことにつながるからだ。少子化・核家族化が進む社会の中で、育児困難に悩む母親たちは容易に支援を受けることができず、ますます深みにはまっていく。養育者である母親を社会で支える体制は、いまだ乏しいのが現実である。そういう意味では、

虐待を減少させていくためには、一つの職種だけではなく多職種と連携し、また、子どものみならず母親たちとも信頼関係を築き、根気強く対応していくことから始めなければならない。

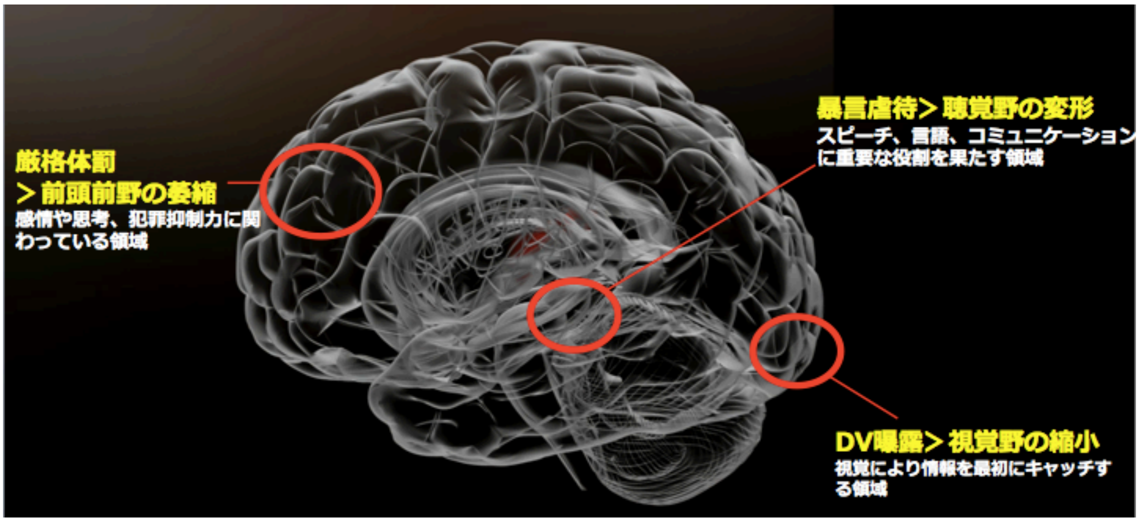
私が所属する機関の研究室では「子どものこころ」を解明・治療・支援するための研究が進行中である。脳の発達の分子・細胞レベルでの研究や、ヒトの脳活動を可視化し脳の機能的発達を追う、生物学的な基礎研究に加え、不登校や引きこもり、低年齢化する子どもの犯罪行為や発達障害の治療など、臨床に根差した治療・支援のための研究や活動が展開されている。子どものこころの謎や疑問に対する解明にはいまだ問題が山積しているが、こうした研究成果から一連のエビデンスが出そろいつつある。こうした研究に基づいた理解によって、大人が責任をもって子どもと接することができる社会を築き、少しでも子どもたちの未来に光を当てることができればと願っている。新しい知識は正しい対応法を生み出す唯一の、そして強力な道具になるのだから。

## 文献

友田明美.「新版いやされない傷―児童虐待と傷ついていく脳」, 診断と治療社, 2012.

友田明美.「子どもの PTSD（友田明美, 杉山登志郎, 谷池雅子編）」, 診断と治療社, 2014.

## プロフィール

福井大学子どものこころの発達研究センター教授、医学博士。28年間にわたって、子どもの発達（小児発達学）に関する臨床研究に従事。福井大学附属病院子どものこころの診療部部長、大阪大学大学院連合小児発達学研究科福井校教

授、生理学研究所多次元共同脳科学推進センター客員教授を兼任。2019〜2011 年、日米科学技術協力事業「脳研究」分野グループ共同研究・日本側代表者。趣味はパワーヨガ。